

論文の文要旨	
論文題目	要因に基づくアプローチを用いてシリア強制移民とトルコ人コミュニティへの統合の複雑さを明らかにする
氏名	ジアド アルアフマド
2011年にシリア紛争が始まり、近年で最も多くの避難民が発生した。2024年現在、世界のあらゆる地域にシリア人避難民が存在するが、彼らを最も多く受け入れているのは、シリアと国境を接する国々である。特にトルコは、シリア人強制移住者を世界で最も多く受け入れており、同国の一時保護制度に登録されている人数は300万人を超える。それにもかかわらず、シリア情勢は未だ先行きが不透明であり、避難民となったシリア人に対する明確な解決策が打ち出されていない。現状、彼らが自主的に帰還できる可能性は極めて低く、第三国への再定住の機会もまた限られている。したがって、統合こそが、トルコやその他の受け入れ国における強制移住させられたシリア人の窮状を救うことができる、唯一の実行可能かつ持続的な解決策である。 トルコにおけるシリア人避難民について、当初、統合は問題視されず、トルコ政府は門戸開放政策を実施し、シリア人は「同胞愛」と「ゲストフード」の名の下に受け入れられた。そのなかで、宗教、文化および歴史を共有することが、シリア人とトルコ人の距離を縮める上で重要な役割を果たした。しかし、シリア人に対するこの開放性は長く続かず、しばらくすると、緊張、暴力および社会的距離が広がり始め、シリア人の存在は、トルコの将来を考える上で最も議論される主題のひとつとなった。本論文は、次の問いに取り組むことで、この継続的な議論に貢献することを目的とする：文化や宗教を含む複数の共通点があるにもかかわらず、なぜシリア人強制移住者とトルコ人による受入コミュニティとの統合は、困難に直面しているのか？ 本論文では、統合には世界的に受け入れられている定義がなく、利用可能な枠組みを実証研究に容易に適用できないことを考慮に入れる。また、現状の統合を研究・検証することは複雑な作業であり、よりニュアンスのある実証的な結果を得るためには、概念的な取り組みがさらに必要とされる。そこで、本論文では、統合に関する最近の理論的発展を適用して、さまざまな文脈における統合の研究に利用できる単純な概念モデルを開発した。このモデルを構築する枠組みは、統合が動的かつ相互作用的なものであり、それが行われている文脈に応じて変化し得るいくつかの影響因子に基づいて変化し続けるという考えに依拠する。また、この枠組みは、受け入れられる側と受け入れる側という2つのコミュニティが、統合の進展に等しく関与しかつ責任を負っていること、統合の領域と次元はつながっており、それらを互いに切り離すことは不可能であることを説明している。 上述の研究課題に答え、シリア人とトルコ人のコミュニティの統合に影響を与える主な要因を明らかにするために、開発した概念的枠組みに説明的アプローチと定量的研究手法を用いた。そこで、実地調査として、トルコの2つの主要都市であるがジアンテップおよびイズミ	

ルでマルチセクター調査を行った。具体的には、無作為抽出とキッシュ表の手法を用い、シリア人 1,076 人、トルコ人 1,115 人を対象に調査を実施した。そして、従属変数と独立変数を設定し、それらが重回帰分析の仮定に反しないことを確認するために事前テストを行った。分析の妥当性を確認した後、SPSS を用いてデータをテストし、シリア人とトルコ人のそれぞれを対象とした 2 つの重回帰モデルを作成した。

その結果、文化的・宗教的類似性はトルコの文脈における統合を促進する上で重要な役割を担っているものの、持続可能な形で統合を実現するには十分ではないことが明らかになった。他にも重要な要因があり、これらの要因が統合プロセスを促進したり、妨げたりすることもある。シリア人コミュニティにとって、促進要因として作用する重要な要素は、年齢、トルコ語能力、生活満足度、友人関係、民族的飛び地の存在、文化的類似性、サービスへのアクセス、法的地位である。その一方で、日常の否定的な出会いが主な障壁となっている。トルコ人コミュニティにとって、促進要因として作用する重要な要素は、年齢、友人関係、文化的類似性、サービスへのアクセス、責任意識、宗教的愛着である。その一方で、障壁となる重要な要因は、性別、情報不足、偏見である。

本論文は、4 つの点で先行研究に貢献するものである。第 1 に、先行研究が統合の領域と次元に焦点を当てたのに対し、本論文は統合を調査する新たな方法として、主に促進と障壁という 2 つの形態にかかる統合要因に焦点を当てた。第 2 に、先行研究の大半が、主にシリア人という単一のコミュニティのみに焦点を当てていたのに対し、本論文では、迎えられる側と受け入れる側の両方のコミュニティを同時に考慮に入れている。第 3 に、先行研究の大半が、質的研究法を用いた小標本に焦点を当てていたのに対し、本論文では、コミュニティや国家レベルの現実をよりよく理解するために、大標本に焦点を当てている。第 4 に、本論文では、これまでの統合研究ではほとんど用いられてこなかった重回帰という高度な統計的仮設検定を採用している。